

会 報

71号



函館の歴史的風土を守る会会報

No.71 H14. 9. 20

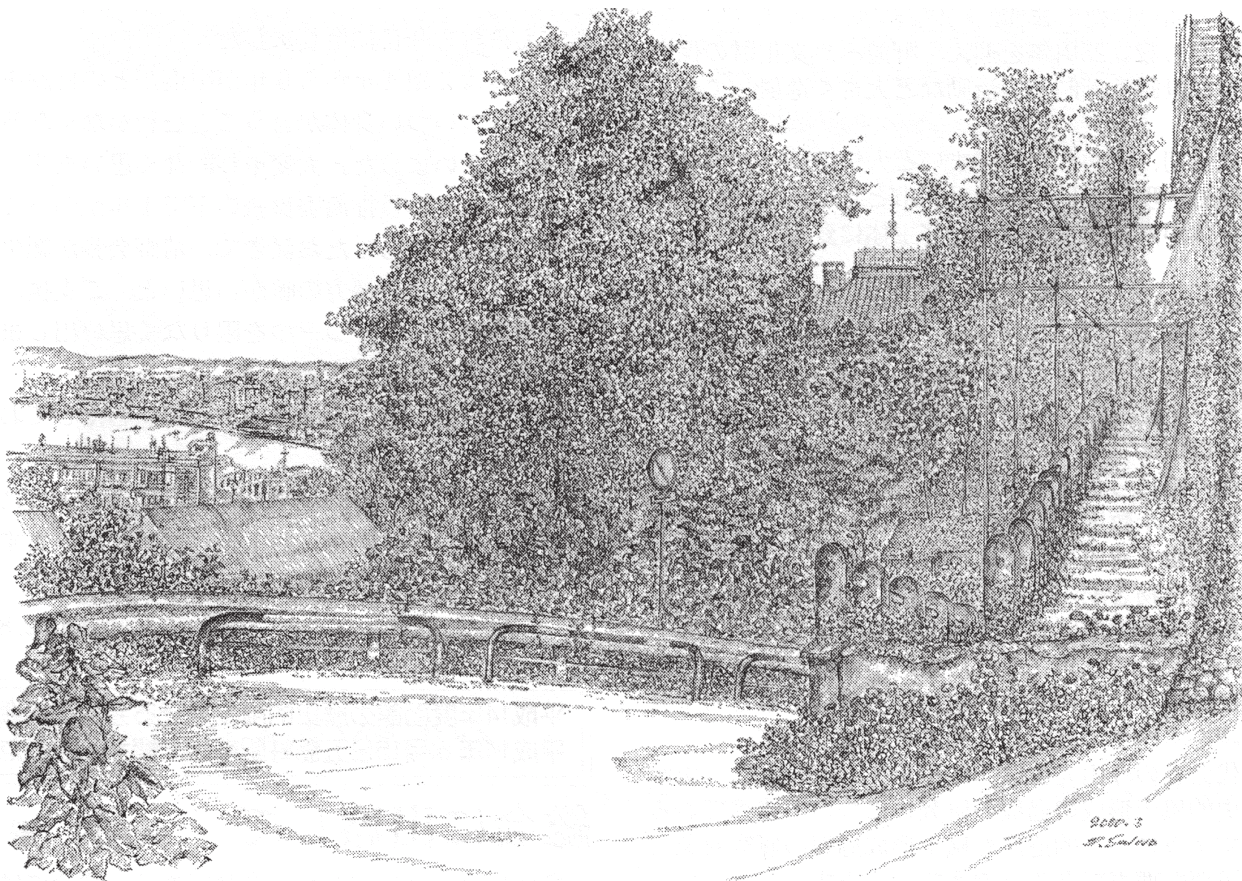
発行所 函館の歴史的風土を守る会

事務局 函館市五稜郭町43-9

五稜郭タワー株式会社内

電話 (0138) 51-4785

印刷所 (有)三和印刷 電話 45-0845



「坂 道」

清 野 恒 夫

この坂道に名称はない。

登り切ると「函館盲啞院」跡地にでる。寄宿舍の一部が民家に改築されわずかに残ってはいるが、赤煉瓦の煙突が昔日の面影を留めているに過ぎない。

敷地確保の大きな石垣に並行して通路がある。脇には視力障害の子どもたちの歩行と身の安全を守るため頑丈な手摺りが設置されている。今でも使用に耐えるほど堅固であり、大正時代の職人の心意気が暖かく伝わってくる思いがする。

明治二十八年、アメリカの宣教師ドレパーが母とともに青柳町に「函館訓盲院」を開設した。大正十四年この坂道の上に新築移転した。建設にあたってこの事業に半生を捧げた名校長佐藤在寛翁は市民に寄付金を募った。木造二階建、約百八十名の子どもたちが学ぶ校舎を建て、財団法人として運営した。

現在、盲学校は田家町に聾学校は深堀町に移り、道立養護学校となっている。

昭和十二年、函館を訪れたヘレン・ケラー女史も人々の歓呼の声に迎えられこの坂道を登った。

坂の登口には重要文化財「函館市公会堂」があり、年間五百万人もの観光客で賑わっている。・・・しかし、今、この坂道を登る人はいない。

**函館の歴史的風土を学び、知らせ、守ろう／新旧会長挨拶／総会参加記
宇野均さんを偲ぶ会員の声特集／お知らせ**

会長就任に当って

函館の歴史的風土を守る会会長 清野 恒夫

今年度総会において、浜島国四郎会長の後任として選出されましたが、私には予期せぬ指名であり、余りの重責に戸惑いを覚えております。勉強しつつ皆様と共に会を進めて参りたいと意を決しておりますのでよろしくお願いいたします。

歴風会も設立25周年を迎え、町並みや文化財の保存運動及び景観条例制定の活動など大きく進展してきました。

結成当初、静かなたたずまいと人情の行き交った西部地区も、現在では国際観光都市として再生され、町並み自体が商品化されて観光客主体に変貌しつつあります。

伝統的和風の技術の中に洋風を巧みに取り入れた函館独自の創意に満ちた建造物、踏み固められて歴史の重厚さを感じさせる石畳や路傍の石垣などもアーバンリニューアルされて、確かに美しく整ってきましたが異国の擬似的アーキテクチャーになり、何となくよそよそしく感じられるのは私だけではないと思います。

また、二十数度の大火の教訓によって、広軌な道路をつくり樹木を植えて防火帯とし、その先に耐震耐火の公共建造物を配する街の構造は、全国有数の防災計画都市として函館固有のものであり市民の誇りでもあります。その一角にあった東川小学校が解体されたことは、街づくりの歴史的観点から事前に市とも十分に論議をすべきであったと反省しております。

初代会長の今田先生は「れきふう」創刊号で、「函館の歴史的風土形成の過程の研究」について述べておられますように、人的遺産も風土形成過程の研究対象となる重要な要素であると考えております。

1860年の開港以来、アジアの辺境に位置する函館にやって来る異国の軍人や商人、宣教師は、おそらく冒険家的スピリット、調査研究をライフワークとする豊かな知識、布教に対する激しい情熱などを持ち、その影響を受けた函館人は多かったと思います。それらの人物や現在も尚その精神を受け継いでいる方々についても、今後、よりスポットを当てていくべきと考えております。

町並み、建造物、生活様式、函館人の精神まで外国人と異国の文化によって形成されてきた過程をみれば、函館のコンセプトはやはり異国（情緒）であると思います。

グローバル化される都市空間において、函館における異国（情緒）とは何かを基本に、創意に満ちた「歴風」運動を展開するため、皆様と共に模索していこうと考えております。

函館の歴史的風土を守る会の更なる発展のため、会員の皆様には会の調査研究、イベントに多数参加され、大いに論議を深めていただきますようお願い申し上げます。

会長退任のことば

相談役 浜島 国四郎

1988年4月、初代今田会長の病気が治るまでとの話で引き受けながら、歴風会の生みの親とも言うべき、田尻さん、故工藤事務局長、運営委員の皆様はじめ会員の方々、そして歴風会を外部から支援下さる人々にも支えられて今日に至りました。

会の長は2期4年から6年が限度だとの持論を言いながら、ついつい身体が言うことを利かなくなる迄、続けてしまいました。大変申し訳なく思います。

今回、石井役員推薦委員長の下で1年かかってでもの意気込みのこもったお働きで、清野会長が誕生しました。これ迄の皆様方の暖かい思いと、ご支援、ご協力を頂いたことの一つ一つを限りなく思い出します。唯唯、感謝の一語に込めさせていただきます。

新会長の下、会の発展を心から祈念いたしております。

私も今は、身体の訓練中ですが、動けるようになりましただらう、お仲間に入れて頂ければと思います。

永い間、本当に有り難うございました。

(2002. 8. 30)

平成14年度函館の歴史的風土を守る会定期総会が、平成14年6月15日五島軒駅前店で開かれました。

総会に出席して 大河内 憲司

私は当会設立当初からの会員である。総会には新しい会員も参加し、役員の顔ぶれも一新した。今後の会の活動に期待したいところだが、現状のマンネリ化を打破できるかどうかが課題だ。事業計画や活動も前年と全く変わらず、自発的で真新しいものはない。資料の中の会務報告は事務局日誌そのもの。言わば記すに足る活動がなかったということか。

ここ数年来の函館商店街を中心とする街並みの崩壊や景観問題に、我が会はどのように取り組んできたか。見て聞いて学ぶことはしても、何かを知らせ守ってきたらどうか。

いつのまにか市民に仲よしクラブと囁かれ、このまま表彰団体の役割に甘んじていてよいのだろうか。恒例のチャリティーパーティーの発案者である私にとっては、精神的な衰えを感じさせる当会のあり方に内心忸怩（じくじ）たるものがある。総会であらためて痛感したのは、リーダーシップの必要性和歴風会設立時の原因に帰ることだった。

宇野 均さんを偲ぶ

（ありし日の宇野 均さん）



宇野 均さんの御霊へ

函館の歴史的風土を守る会会長 清 野 恒 夫

宇野さんの目を通して、ファインダーの中に切りとられた函館の情景は、実に美しく感動的でありました。消えつつある異国情緒感、薄くなる歴史の重量感、函館の町並み保存にとって厳しい現状を、表現上必須の美的な構成と色彩に託して現す苦心が滲み出ているように感じておりました。アイロニーを漂わせる作品は多くのことを語り、拝見する度にこの美しい街の維持継続を計らなければとの思いを強くしておりました。

宇野さんは本当に活動的な報道写真家でありました。東奔西走し多くの知己を持ち、函館の情景の背後に存在する大量の情報を得ながら、驚きや感動を伝える写真を作ると同時に、世の動向にシビアに対峙できる感性と展望する力を持っておられましたので、私達の市民運動の捉え方の甘さ、活動へのアプローチ不足には苛立ちを感じていたのではないのでしょうか。

本社に転勤しても函館に居を残し、単身赴任もいとわず離函しなかったのは心から函館の街を愛し、私達の運動に共感していたからだと自負しております。

私達は町並みの変化を見据え鋭く核心に迫る意見、助言、指針そして知恵という財産、強力なリーダーと未来を見通す眼力を失ってしまいました。誠に筆舌に尽くせぬ程の損害であり無念さで一杯であります。

宇野さんが私達に何を託して旅立ったのかを知ること、そしてその思いを運動の中に取込み推進することが、宇野さんに対する最大の追悼になるものと念じ、函館の歴史的風土を守るためさらに努力を重ねる決意であります。

会員一同心から宇野さんのご冥福をお祈り申し上げます。

宇野さんを偲ぶことば

歴風会副会長 田 尻 聡 子

数年前大分県臼杵で全国町並みゼミがあり、宇野さんと私が参加した。宇野さんは故郷の福岡県から車で臼杵入りし楽しく有意義な三日間になった。ゼミに関して宇野さんの伶俐にして周到な論陣を耳にした。過日宇野さんの突然の訃報に接し吾が耳目を疑ったウソウソ…何故何故と深い悲しみの中で「祇園精舎の鐘の音、諸行無常の響きあり…」平家物語の冒頭の一説が計らずも頭をよぎった。

宇野さんの御冥福を心より念じています。合掌…。

「宇野 均さんとの思いで」

チンチン電車を走らせよう会副会長
石 井 満

宇野さんとの出会いは、歴風会で始まるが急速に関係を深めたのは、函館市の市電除雪車「雪2号」復元構想を進めてからです。

折しも、歴風会は昭和61年1月22日開催の第8回チャリティパーティで函館の原風景として「電車の走る町」を宣言し、電車復元を強力に後押ししてくれました。

そんな時、宇野さんの企画・アイデアの提起がどんなにか心強く、頼もしく感じたことはありませんでした。

その一つは、「成田市でも、雪2号を函館市から買い戻し当時の姿に復元しようと盛り上がり、成田市の商工会議所を中心としたメンバーが函館に買い取り打診のため来ていた。このため函館が復元するに当たっては、必ず成田のこのメンバーに筋を通さなければいけない。」

その二つは、「戦時中の銃後の女性と平和の観点で、会長には何としても女性を据えなければ」との二つのアドバイスを戴いた事です。

このため、市民運動が盛り上がり、平成5年5月10日、市制施行70周年記念事業として「函館ハイカラ号」は完成し、市民は勿論全国の多くの人に愛されて運行されているのです。

こんな、知られざる宇野さんの功績を明らかにするのも、私の役目と思い紹介させていただきます。

この他にも沢山の思い出下さった、宇野さんのご冥福を心からお祈りします。(2002. 8. 25 (日) 記)

「こよなく函館を愛した 小倉っぼ宇野さん」

北海道写真史料保存会
村 井 雄二郎

銀行を出たとたん、宇野氏の奥さんは、額面2,200万円の小切手をわたしに渡そうとした。「だめだめ、奥さん、兄弟でも500万以上の現金を預けると、トラブルの元とありますよ。小切手は現金と同じだから」。

「でも、主人から、先生に預かってもらうようにといわれましたよ」と彼女は平然としていた。彼が本社に転勤して7年目の1991年11月のこと。退職後に函館に住むのは当然と、日吉町の家を土地付きで購入、代金の受け渡しに代理を頼まれたのだった。新、文の二人の子供が高校生の頃。カメラマンとしての腕は、人物の描写にも優れていたようだ。

1980年頃の新聞に載った田尻聡子さんの写真と、数年後の石川助男氏のと、撮影者は宇野氏だった。見事にその人の性格まで表現している映像と思っている。田尻女史、初めは嫌ったらしいが、後でフィルムを手に入れたようで、結構気に入ったのではなかろうか。宇野氏とは家族ぐるみのつき合いで23年目、思い出は尽きない。合掌。

札幌 渋谷 四郎

九州男児 九州に散る、とはいえ、開港五都市景観会議、電車サミット、などなど、やることが山ほどあった宇野ちゃんの、あまりに突然の散り方に、ただ呆然。

道新を卒業して4年、写真部では正論を述べる旗頭として、常にリードしてきたし、細くみえる身体にエネルギーが満ちていて、さすが九州男児だった。

写真部OBの会合が札幌で2度あって、函館から車を駆って参加したし、僕もまた2度便乗し、中山峠を越えて函館に行った。

3年前、今は大麻に居住のハリストス正教会・前司祭の厨川勇先生のお孫さんを宇野ちゃんは、函館市内各所を案内、親身溢れる案内に厨川先生、ものすごく感謝し、感激された。宇野ちゃん もって瞑すべし。合掌。

宇野さんを偲ぶことば

大野町文化財保護研究会（ぶんぽけん）会長
木下 寿実夫

宇野均さんと初めての出会いは「江差山道に行く」という33回のシリーズものの取材で大野へ訪れたときでした。中山分校の親子やぶんぽけん会員と共に台場山へ上ってお話した記憶があります。シリーズの主要な部分が大野であり記事には多くの人が関心を持ったものでした。

大事な思い出は10年ほど前、大野、上磯、七飯の三町交流会を自ら提起し郷土史関係団体を招集したことでした。これは箱館戦争の史跡保存など共通の課題もあり情報交換が必要だろうと言う事で開いたものです。以後この精神は継続しています。

明治になり開拓使が手掛けた三角測量で、その基点に建つ標石が風雪に耐えて一本木地区にあります。町指定になると喜んでくれました。保存について何かとアドバイスをしていただいたことを覚えています。

大野の自然をもっとアピールしようと関係者は「桧沢の滝・大石の沼」に着目し、散策に同行してもらいました。大きく掲載された記事は特に印象深く桧沢の滝はカラーで紹介、強烈でした。

宇野さんは退職後もぶんぽけん事業に時折参加。郷土史に強い思いを抱き、先を見通した見識に、ぶんぽけんは励まされ感謝以外に言葉がありません。ご冥福をお祈りします。

亀田郡大野町字向野 三 上 敏 一

このたび故宇野均様ご急逝に接し、突然の悲報にただ呆然とするばかりで、信じがたいことです。

ご家族の皆様方におかれましては、ご心痛のほどいかばかりかと推察いたし、お慰めのことばもございません。

ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

宇野さんとの出会いは、昭和56年大野町教育委員会で郷土学習「郷土のしおり」のガイド資料作成のオりの写真等のご支援からでした。

更に平成4年町づくりにつながることの一つとして、「埋もれた文化財に光りを当てよう」と、自分の余暇を活用して取り上げて下さり、ご協力、ご指導をいただきました。リーダーとして厚い信望を得ておられた方だけに、ご教示いただきたいことがまだたくさんございましたのに誠に残念でなりません。

また、そば好きだった宇野さんに「大野そば愛好会」の発足を模索していた時、指導者を紹介して下さったのも宇野さんでした。そのおかげで、会も成長することができました。

宇野さんのご懇情につきましては、感謝の気持ちを言葉で言い表すことができない程公私にわたり多くのことを学ばせていただきました。

故人の遺志を継いで、今後とも町づくりのため努力することが、なによりのご供養かと存じます。

合 掌

歴風会相談役 浜 島 国四郎

貴方の訃報を聞いたのは、秋葉さんからの電話でした。余りのことで、唯びっくりするばかりで「とにかく奥さんが帰函してからにしましょうか」と言って受話器を置いても気持ちが納まらず、二、三の委員に電話、経過を見ることにする。

歴風会にとって、豊富な情報・知識に裏付けられた鋭い気迫に溢れる発言を会への愛情と受け止め、私は感謝していました。

歴風会にとっては、本当に大事な方が逝ったと今にして想いを深めております。

今は、その宇野さんの声をきくことが出来ません。唯、愚痴ばかり口をついて出る今日この頃です。今日は、貴方を偲んでみんなが集まっています。私は、宇野さんにご家族一同様の平安を心から祈って参加させて貰っています。

《お知らせ》

①歴風会学習部からのお知らせ、どうぞご参加を！

文化講演会

日時・11月16日（土）午後1時30分～4時30分

会場・サンリフレ函館（函館市大森町）

演題・「文学のなかの函館の風景」

講師・西堀滋樹氏（同人誌「路上」主宰）

50名定員です

②開港5都市景観まちづくり会議

函館大会（平成14年10月18日～20日）

会員の多数のご参加を！

③全国町並み保存連盟主催「全国町並みゼミ」の浦大会（広島県福山市鞆町）が、平成14年9月20日（金）～22日（日）に開かれ、清野会長が出席します。

「西部地区のいま」

副会長 若山 直

函館で歴史的風土を守ろうとすれば、それは西部地区の面影を保存しようとする事と同義語だろう。だが、この地区の保存は限界の瀬戸際にある。古建築の過半が木造だからだ。建物と町並みを保存するという思想は欧州から輸入されたが、我々は両者の建材の違いを直視してこなかった。函館山麓に散らばっている石コロは百万年前の噴火の名残であり、欧州の建物はこの石を素材にしている。残そうという意志さえあれば残すことが可能だが、日本の木造住宅は1世紀と持たない。残せないということが日本の歴史的風土だ。

欧州同様のやり方では当然無理が生じる。かつての昔を感じさせるという条件さえ満たせば、木造が一部鉄筋に変化しても立派な残し方ではないかと思う。旧渡島支庁庁舎は火事で全焼し、火事直前同様に復元されたが、尼崎製缶工場は面目を一新して復元されるはずだ。復元の限界はどこにあるのか。西部地区はいま、建物・町並みをより古く、歴史的な風情で見せるにはどうすべきか、という発想の転換を求めているのだと思う。(2002. 8. 21)

函館市市制施行80周年記念事業

北海道・東北史研究会函館シンポジウムⅡ

(2002. 7/27~29 函館市青少年研修センター) に参加して

運営委員 清水 源太郎

お誘いを受け参加して驚きました。世界の近代史が、ややもすれば時の権力や経済に支配され、歪められる危険性を見極め、真実を伝えるために17回も夫々の地域の歴史を繙き、真摯に活動して来られた研究者の皆

様の成果。これこそ明日の未来社会を築くための「歴史的風土を守る」活動だと思いました。

真実を見失った時、地球は「猿の惑星」になりかねません。

ご 報 告

函館市立旧東川小学校校舎保存に関する要望書について、以下のように平成14年6月4日付で、函館の歴史的風土を守る会代表 浜島国四郎名で、函館市長、函館市議会議長宛に提出いたしました。要望書の全文を掲載して、会員の皆さまへのご報告に代えます。

函館市立旧東川小学校校舎保存に関する要望書

函館市立旧東川小学校は、函館市に遺存する数多くの近代建築遺産の中でも、昭和9年の函館大火後の復興小学校として新設された不燃校舎5校（青柳・高盛・東川・的場・大森）の1校である。

復興都市計画に基づき、小学校建築は不燃質の近代的構造、位置は緑地帯の終端もしくは交差点付近に求められた。児童教育に閑静な環境を与えると同時に、植樹帯と一体となって防風、防火の目的を意図したものである。

東川小学校は、地区の終端に位置し四周に空地をとったロ字型のブロックプランである。三方を校舎、一方を体育館としている。さっぱりとした平板な外観をみせており、階段室の丸窓以外は、装飾らしいものは排除され、復興建築の速やかな建設に対処したものと思われる。

歴史的建築物の保護は、指定文化財だけではなく西部地区のバラエティーに富んだ歴史的建築物の保護ないし活用状況を一見すれば明らかのように、文化財に選定されなくても、現存する歴史的な公有財産を、最もふさわしい姿で活用するという、ごく当然の方向が取られるべきである。古くなった建物を、手間ひまをかけて補修しながら再利用は大変なことであるが、それだけの効果が期待で

きる。費用のかけ方について、このようなケースでは、多寡さまざまに考えられるが、基本的には、新築の費用と同額の投資をしても良いと思う。大規模修復も建物の維持管理の一種にほかならないが、一定の年限で維持のためにイニシャルコストに匹敵するほどの投資がなされるのも、建築を大切に良い状態で使い込んで行くためには、むしろ不可欠な方策であり、また市民的なコンセンサスも十分に得られるものと考えられる。

*** 編 集 後 記 ***

9月下旬になりました。前任地では朱に染まったヒガン花の群落に圧倒されたことを、いま頃になると決まって思い出します。夕映えとその景色に目を瞞ったものです。聞けば、秩父では食糧難にはこの根を食べたとか——。さて、10月・11月には多くの行事があり、会員の皆様のご参加をお待ちしております。今号では、宇野均さんを偲ぶ会員の切々たる声を取りあげました。合わせて新会長の抱負もありまた、少々辛口のものもあります。これを機会に、皆様のご健筆を頂きたいものと編集部では期待しております。季節の変わり目です。お大事に。

(きよの きみ)